

誰もが安心して暮らせる社会をめざして

～物語を読んで考えてみませんか～

ぼくがそばにいるよ

作：人権教育課

ぼくの名前はシロ。この家に来て5年になるんだ。ぼくには大切ななぞくがいる。とってもやさしいお父さんとお母さん、そして、ぼくととっても仲良しのお兄ちゃん！



でもね、お父さんが「新型コロナウイルス感染症」という病気になってから、病気が治ってからも家族みんな元気がないときがあつてね。ぼくはすごく心配で、一生懸命お父さんやお母さんやお兄ちゃんに話しかけたんだ。みんなやさしくしてくれたけど、なんだかとてもさみしそうだった。毎日行っていた散歩も行かなくなってしまって…。



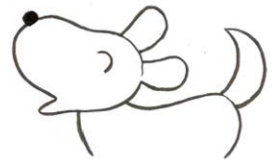
そんなある日、お兄ちゃんが「シロ、散歩に行こう」と言ってくれたんだ！ぼくは、うれしくてうれしくて、お兄ちゃんの周りをクルクル回ったよ！久しぶりの散歩はとっても気持ちがよくて、お兄ちゃんも楽しそうに笑ってくれたよ。

ところが、いつもの公園に着いたとき、お兄ちゃんの笑顔が消えたんだ。どうしたんだろうって見ると、前にぼくたちに「コロナウイルス！」と言って逃げていった友だちがいたんだ。またいじわるを言ったら、今度は『ダメ！！』って大きな声で言ってやるぞ！とお兄ちゃんの前に立ったんだ。すると、その子が近づいてきて、「ぼく、毎日ここで君を待ってたんだ」と言ったんだ。お兄ちゃんが、「どうして？」と聞くと、友だちはこう話してくれた。「ぼく、君に“コロナウイルス”って言って逃げたでしょ。あれから、ずっと心がモヤモヤしていた。君は何も悪くないのに、どうしてあの時あんなこと言ったんだろうって…。君のお父さんだって病気にかかりたくてかかったわけじゃない。病気になって一番つらかったはずなのに、すごくひどいことを言っちゃった。あのときは本当に…ごめんなさい」

そう話すと、友だちの目から、涙がポタポタ落ち

てきた。ぼくは、「コロナウイルス！」って言われてからのお兄ちゃんをずっと見てきたから、どう思ったかなってお兄ちゃんの顔を見上げたんだ。しばらく黙ったまま、じっと前を見ていたお兄ちゃんは、こう言ったんだ。

「ぼく、あれから学校へ行くのも、散歩に出るのも、とても怖かった。また、何か言われるんじゃないかって。でも、ある日お父さんが、そんなぼくを見て、『ごめんな』って言ってきたんだ。その時、ぼくはドキッとしてね。お父さんが元気になって、すごく嬉しかったのに、新型コロナウイルス感染症になって一番つらかったお父さんが『ごめん』って謝るなんて…。ぼく、自分のことしか考えてなかったなって思った。だから、ぼくはその時から、お父さんみたいな思いをする人がいないようにしようって心に決めたんだ。当たり前のことかもしれないけど、今ぼくにできることは、大切な人と一緒に喜びあったり、笑いあったり、悲しいときは一緒に悲しんだりすることで、“安心して。ぼくはそばにいるよ”ってメッセージを送ることかなって思ったんだ。そう話すと、お兄ちゃんは友だちの方を向いて、「ありがとう、ずっと待っていてくれて」。そう言って、笑顔で、「君もぼくの大切な人だよ。また、サッカーしよう」と言って、お別れしたんだ。ぼくが後ろを振り返ると、友だちも笑顔になってたよ。



帰り道、お兄ちゃんは、来たときよりもずっと力強い足取りで歩いてたんだ。そんなお兄ちゃんに、ぼくはこう伝えたよ。『お兄ちゃん、ぼくにとって、お兄ちゃんはとってもとっても大切な人だよ。ずっとそばにいるから安心してね。みんなが、お兄ちゃんのように“安心してね。そばにいるよ”ってメッセージを送れたら、きっとみんながつながって、笑顔いっぱいの世界になるね』ってね。



★ 作者から ★

コロナ禍の下、今まで当たり前に行ってきたことができなくなっています。でも、その中で改めて大切にしていきたいものが、色濃く見えてきた気がします。それが「人とのつながり」です。このような時だからこそ「人とのつながり」を大切にしながら、誰もが安心して暮らせる社会をつくっていききたいですね。